

## 【北海道支部例会報告書】

北海道支部は、2月17日(土)に支部例会を行いました。対面およびオンラインで実施いたしました。参加者は20名でした。第1部では、参加者全員でミュージッキングを体験するワークショップ(写真)も行いました(「音楽づくりの活動に生成AIと画像生成AIを援用する試みとミュージッキング(映像付き発表)」の発表に関連して)。第2部では、授業や活動を問題解決評価観と評価の三観点との関係性を捉え直すことから迫る討議、第3部では、音楽科の範囲にとらわれない活動の楽しみ方を自由に語り合いました。

-----詳細-----

### 第一部 研究発表(動画視聴を含む)

1.「音楽づくりの活動に生成AIと画像生成AIを援用する試みとミュージッキング(映像付き発表)」発表者：芳賀均会員(北海道教育大学旭川校)・盛田祥史会員(北海道教育大学旭川校学部生)・安久津太一(岡山県立大学)・壽谷静香(武庫川女子大学)  
→音楽づくりの活動に人工知能を取り入れる試みについて、ChatGPTおよび画像生成AIを取り入れる形で行うことを企図した構想について、実演映像を伴って提案した。それに続いて、それをミュージッキングで活用する試みについて展望する討議を行った。さらに、「雪」を題材に、参加者全員でミュージッキングを体験するワークショップも行った(写真)。



### 第二部 討議：音楽の授業や音楽に関わる活動を支える考え方について

○「鑑賞と表現の一体化、半創作、そして、教師の生演奏」「断片的な知識の発生しない授業づくり―箏の授業を通して―」「学芸会ならではの音楽―素敵な世の中をつくっていける子どもたちを育てるために―」と「思考・判断・表現」との関わり(提案者：芳賀均(北海道教育大学旭川校)・莊司彩乃(北海道教育大学旭川校1年)・竹谷奏音(同)・由良ひより(同))

→学習者の視点で授業や活動を捉えたとき、望ましい指導の在り方とはどのようなものとなるのか、問題解決評価観と評価の三観点との関係性を捉え直すことから迫った。その際、「教師の生演奏の活用」や「箏の授業」、「学芸会の指導」を題材に、「STEAM教育における四象限の評価表」の活用について議論した。パネルディスカッション的な議論によって、「断片的な知識」の詰め込みを防ぐための視点を確認した。

### 第三部 新しい活動のアイデアを考える

○食べられる立体図形楽譜の活用の可能性を探る―STEAM教育を考慮した「音楽づくり」の活動―(活動映像あり)(提案者：芳賀均(北海道教育大学旭川校))  
○弥生時代の土笛に係るSTEAM教育実践の方法を探る(提案者：盛田祥史(北海道教育大学旭川校3年))  
○聴覚や視覚に頼らずに実感がもて、体感できる音楽授業の可能性を探る(意見交流)

→音楽科の範囲にとらわれない活動の楽しみ方を自由に語り合うことから、新しい授業づくりの可能性を探った。

参加者からは、「学生さんの学校現場に対する率直な考えが聴けてよかった」「『ミュージッキング』の体験が面白かった」「食べられる立体図形譜の話が面白かった。演奏指導でも『まあるく、柔らかく』とか『硬い音で、パリッと、ツヤのある』という言い方をするので、立体化は『音を可視化する』が進化して『触れる化』という感じがした」という趣旨の感想が寄せられた。

文責：芳賀均